資 料

青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み

長 尾 博*

AN APPROACH TO MEASURE EGO DEVELOPMENTAL CRISIS STATE DURING ADOLESCENCE

Hiroshi NAGAO

The purpose of this study was to develop ego developmental crisis state scale (ECS) during adolescence and its ego developmental crisis state by means of ECS. In a first study, 302 students from 12 to 23 years of age completed questionnaires on the ego developmental crisis state during adolescence. Their responses were factor analyzed. Consequently, ECS for adolescents, containing 26 items of self examination problems and 24 items of self aware symptoms, was constructed. The reliability of ECS was discussed with respect to alpha coefficients and test-retest correlations. In a second study, 279 students from 12 to 23 years of age were administered with ECS. The main results were as follows. 1) Senior high school students scored higher on self examination problems score and self aware symptoms score than any other groups. 2) It was found that self examination problems score were related to self aware symptoms score. 3) While there were differences between grades on self examination problems score, there were no differences between males and females, or between grades on self aware symptoms score. There were also differences between males and females, and between grades on the score of subscales of the ECS. These results gave some therapeutic suggestions for the psychotherapy of adolescents.

Key words: adolescence, the ego developmental crisis state scale, self examination problems score, self aware symptoms score.

青年期の危機 (Adoleszenzkreis) という概念は, Kretschmer (1949) によって提唱されたが, その背景には, 青年期における体質や身体的成熟上の変化を基盤とした心身の不均衡という観察内容をもとに, 青年期に発症しやすい特定の精神疾患単位 (診断名) 構築の試みがあった。その後, この概念は, ドイツ語圏内の臨床家によって, 青年前期に発現しやすい青年期特有な不適応現象を包括した説明概念として用いられてきた。しかし, 今日では, 青年期の危機という言葉は, Erikson (1959) の提唱した自我同一性の危機 (ego identity crisis) 概念をも含めた青年期を人生の中の転換期の年代としてとらえる幅広い意味をもつ語として用いられてきている。

とくに, Speer (1949), Meyer (1962), 下坂 (1976),

* 活水女子短期大学 (Kwassui Women's Junior College)

清水 (1976) らは, 青年期の危機 という語を身体的成熟よりむしろ人格的成熟に比重においた青年期の成熟危機 (Reifungskrise der Jugendblüte) という語に改めてとらえ直し, つとにこれを精神疾患単位として用いるべきでないと主張している。彼らの提唱した概念と Erikson のいう自我同一性の危機概念との相違を整理すると, (1) 危機状態の発現年齢を前者は青年前期と, また後者は青年後期ととらえ, (2) 前者の状態においては, 親子関係上で独立と依存のアンビバレンスが高まりやすいこと, つまり親との心理的距離が定まりにくいこと, また交友関係で Häfner (1954) のいう自己収縮 (Ich-Anachorese), つまり疎外感を伴った自己卑下した態度や行動が生じやすいことをあげ, (3) このような親子関係において, 依存したままであるか, あるいは独立してゆくかという決断や進路

選択のような人生における二者択一の決断に迫られた際の青年のもつ決断力 (Entschlußkraft) を危機状態を克服してゆく重要な点として強調していることの3点があげられる。

そこで筆者は、自らの臨床経験と上記の青年期の成熟危機や自我同一性の危機に関する見解とを総括して、青年期の自我発達上の危機 (ego developmental crisis) という語に改め、その状態を以下の通りに定義した。

まず、「危機 (crisis)」という語を児童期までとは異なった心理状態が生じる発達上の「転換期」という意味と、社会適応の観点から、不適応状態や精神医学的疾患に陥りやすい「危険な状況」という2つの意味でとらえて、青年期の自我発達上の危機状態を、児童から成人へと転換する青年前期から後期にかけて、自我発達上の課題、すなわち青年前期頃より始まるこれまでの親に対する心理的に依存した関係からいかにして独立したものへと展開してゆくか、あるいは青年後期より始まる自分とは何者か、つまり社会の中でいかにして思想的に自分を位置づけるかという自我同一性の確立の課題に関する決断に迫られた際、それらの決断が困難となつて、既述した「危機」という語の前者の意味であるところの親子関係上のアンビバレンスや交友関係上での自己収縮が高まり、過去からのあらゆる心的葛藤が露呈しやすい特徴を示す状態が生じ、その結果、とくに自我の弱い者は、現象として、既述した「危機」という語の後者の意味であるところの不登校や反社会的行動などの問題行動や抑うつ、心気、強迫、恐怖などの神経症的反応、あるいは摂食障害や身体的痛みなどの精神・身体的反応などを伴う不適応状態を呈することであると定義した。このように青年期の自我発達上の危機状態を2つの意味から定義したのは、前者と後者の危機状態は因果関係をもつものの、その個人の置かれた状況や自我の強さによって、前者の危機状態にあつても後者の危機状態に陥らない者もいるととらえたからである。

本研究は、この定義に基づいて青年期の自我発達上の危機状態尺度を作成し、さらにこの尺度を用いて青年期の自我発達上の危機状態の性差や学年差を明らかにするものである。

研究 I

目的

青年期の自我発達上の危機状態尺度を作成する。

方法

調査対象

福岡県内の公立中学校の2年生93名 (男子42名、女子51

名)、県立高校の2年生82名 (男子40名、女子42名)、私立A大学の1年生72名 (女子)、私立B大学の3年生55名 (男子31名、女子24名) の計302名が対象とされた。

調査時期

1986年10月

尺度作成の手続

(1) 暫定尺度項目の作成

九州大学教育学部心理教育相談室に1983年4月から1986年7月までに来談した13歳から20歳までの青年期来談者92名のうちから既述した定義に該当する事例* 81名 (男子64名、女子17名) を選出し、既述した「危機」の2つの意味を考慮してそのカルテを中心に主訴 (問題) や治療過程で示された特徴を整理した結果、(A) 来談者が内省して表現した児童期までの心理とは異なった内容の共通特性項目28 (問題内省項目)、(B) 不適応状態と関係をもつ頻度の高い主訴 (問題) である現象的特性項目32 (問題自覚項目) の計60項目が抽出できた。この60項目を臨床歴10年以上の心理学専攻の3教官に既述の青年期の自我発達上の危機状態の定義と項目内容について検討を受けたところ、100% の一致率で全項目が基本的に妥当な内容であった。

(2) 調査の実施

(A) の28項目は、5件法で「全くその通りである」を5点、「全然そうでない」を1点として得点化し、(B) の32項目は、3件法で「あてはまる」を3点、「どちらともいえない」を2点、「あてはまらない」を1点として得点化した。なお、(A) の項目中8項目と(B) の項目中7項目は、方向を逆転して回答させ、危機状態が高まるほど合計値が高得点となるように得点化を行った。

(3) 因子分析の施行

(A) の28項目と(B) の32項目の評定値に対して各々学年別、男女別に主因子法による因子分析を行ったところ、因子構造に大きな差はみられなかった。そこで、さらにバリマックス回転を行った結果、(A) では8因子、(B) では10因子が抽出された。これらの因子を青年期の自我発達上の危機状態を測定する下位項目尺度としてみるために各因子の α 係数**をみたところ、(A) のうちの1因子と(B) のうちの3因子が $\alpha \leq .30$ であったため、これらは尺度の信頼性 (内的整合性) が低いととらえ、危機状態尺度から省き、最終的に(A) の7因子と(B) の7因子を危機状態尺度の下位項目とした (TABLE 1 と TABLE 2)。

(4) 尺度の安定性

* 臨床心理学的には、登校拒否67名、非行傾向12名、家庭内暴力2名と診断できる事例であった。

** Cronbach の信頼性係数

TABLE 1 自我発達上の危機状態下位項目尺度 (A水準)

下位尺度	項目内容	因子負荷量								下位尺度内での	
		F ₁	F ₂	F ₃	F ₄	F ₅	F ₆	F ₇	h ²	α 係数	総項目得点との相関
決断力欠如	(1) 今、自分の将来の進路について決定を迫られても何を基準にして考えたらよいかわからない	.79	.21	.08	.03	-.02	.14	-.06	.73	.72	.54
	(5) これまで自分自身で将来や進路を決定した経験が少ないため、その決定を迫られると不安になる	.69	.06	-.08	.10	.25	.04	.07	.58		.49
	(13)※今、将来の進路については、じっくり考えていてその決断ができる段階である	.70	.05	.22	.05	-.04	-.07	.05	.56		.51
	(17)※決断力があるため、今、何かの決定を迫られても混乱せず、決断できるだろう	.50	.05	.37	-.01	.43	.01	.05	.56		.48
	(21)※大切な決断を迫られた場合、私はいつもじっくり考えた上で、思い切りよく決断できる	.39	-.25	.33	.35	.19	.06	-.04	.51		.36
同一性拡散	(7)※他人から「仲間はずれにされている」と感じることはほとんどない	.10	.53	.34	.18	-.21	.10	-.37	.67	.69	.32
	(9) 私は、どのような職業にもつけないという気持ちになる時と何にもなれないのではないかとこの気持ちになる時がある	.13	.62	-.03	-.01	.10	-.03	.25	.48		.38
	(12) 私には、「理想の自分」がたくさんあって、どれが本当になりたい自分なのか、さっぱりわからない	.30	.57	-.13	.08	.18	.12	.08	.51		.45
	(19) 今、何かに追いつめられているような感じをもっていて、自由に動けない気持ちである	-.02	.48	.07	.15	.40	.03	.02	.49		.42
	(20) 今の自分は本当の自分でないような気がする	.05	.62	.08	.10	.30	.16	.03	.52		.53
自己収縮	(23) 人といっしょにいて、たまたま自分がいやになることがよくある	-.05	.53	.25	.19	.08	.28	.18	.49	.63	.46
	(15)※私の生活は、いきいきしているように思う	.06	.25	.49	.40	.25	-.04	.17	.56		.40
	(27)※私はこの社会では欠くことのできない貴重な存在だと思う	.19	.03	.67	.03	.18	-.03	-.04	.60		.49
	(28)※私は悪い友だちに左右されることがなく、いつも正しい決定を下すことができる	.09	.05	.75	.68	.02	.13	.00	.61		.42
	(3) うちとけて話ができる人は、私にはあまりいないように思う	.07	.14	.08	.81	.05	.16	-.06	.72		.65
自己開示対象の欠如	(11) 私には、わたがいに本当に理解し合える人は、ほとんどいないと思う	.03	.13	.05	.87	.06	.07	.05	.79	.79	.65
	(4) 何でもものごとを始めるのがおっくう(めんどろ)だ	.07	.08	.02	.10	.66	.09	-.07	.50		.35
	(8) やれる自信があっても、人から見られているとうまくできない	.13	.21	.02	.15	.54	-.02	.31	.48		.33
	(16) 今、1つのことに集中して打ち込むことができない	.06	.20	.18	-.08	.62	.02	-.10	.48		.30
	(6) 困っている時や悲しい時に、親に気持ちをわかってもらいたい反面、わかってもらえなくてもいいと思う	.09	.14	.08	.11	.04	.66	.10	.53		.41
親とのアンビバレント感情	(22) 親にもっと理解され、受けてもらいたい反面、理解してもらわなくてもよいという気持ちもある	-.04	.10	.19	-.004	-.02	.78	.13	.68	.60	.46
	(26) うれしいこと、楽しいことは、まず親に報告したい気持ちもある反面、そのことを自分だけで大切にしたい気持ちもある	.10	.09	-.30	.19	.09	.65	.02	.58		.36
	(2) 何かに迷っている時、親に「これでいい」と聞きたい反面、聞かないで自分で解決したいと思う	-.03	.28	.04	.04	-.19	.20	.48	.54		.29
	(10) ひとりで決心がつきにくい時には、親の意見に従いたい反面、自分で決心したい気持ちもある	.15	.15	-.17	.003	-.09	-.02	.72	.59		.36
	(14) 親といると、いっしょにいてだけで何となく安心できる反面、自分をほうっておいてほしいという気持ちもある	-.08	-.05	.24	-.09	.26	.40	.54	.59		.38
親からの独立と依存のアンバランス	(18) 親の言うこと、考えていることは、正しいと信じられる反面、疑問も生じてくる	-.05	.13	.16	.05	.02	.29	.58	.54	.58	.41

※項目は、方向を逆転して得点化した項目 総項目得点との相関は、各項目得点とその項目を除いた下位項目尺度内の総項目得点との相関を示す。

TABLE 2 自我発達上の危機状態下位項目尺度 (B水準)

下位尺度	項目内容	因子負荷量								下位尺度内での	
		F ₁	F ₂	F ₃	F ₄	F ₅	F ₆	F ₇	h ²	α 係数	総項目得点との相関
緊張とその状況の回避	(7) とどきどき、たまらなく家出したくなる	.54	.34	-.02	.14	-.18	-.004	-.02	.53	.73	.49
	(16) いつも緊張してイライラしている	.59	.01	.03	-.02	.21	.20	-.12	.51		.39
	(18) 死にたいという気持ちが生じることがよくある	.65	.28	.07	.10	.03	.01	.06	.57		.56
	(24) 何か恐ろしい考えがいつも頭に浮かぶ	.57	.001	.29	.26	.07	.10	.02	.60		.50
	(28) 毎日のように私をおびやかすようなことが起こる	.70	.06	.18	-.01	.05	-.05	-.06	.55		.53
精神衰弱	(31) 両親や家族は、必要以上に私の欠点をとがめる	.45	.05	.18	.27	-.23	.24	-.16	.56	.57	.39
	(2) 何かにつけてよく心配する	.16	.50	.25	-.28	-.06	.19	-.08	.49		.42
	(8) すぐ感情を傷つけられやすい	.13	.70	.14	.09	-.04	.07	-.13	.67		.50
	(10)※愛うつになることはめったにない	.09	.76	.04	.09	.27	-.02	-.09	.68		.50
	(19) とどきどき、頭に浮かんでくるつまらない考えに何日も悩まされる	.44	.52	.08	.13	-.16	.13	.11	.62		.41
身体的痛み	(5)※心臓や胸の苦しみを覚えることはほとんどない	.16	.20	.65	.001	-.05	.006	.06	.53	.48	.31
	(29)※体のどこかが痛むようなことはほとんどない	.08	.03	.76	.06	.04	.17	-.06	.64		.31
	(20) 非常に不思議な経験(例えば霊を見たとか、神の声を聞いたなど)をしたことがある	.01	.21	.38	.55	.03	-.16	.04	.56		.32
	(22) 最近、あまり食べなくても空腹を感じない	.20	.04	-.03	.68	.007	.13	-.05	.61		.26
	(26) 何を食べてもおいしくない	.20	-.06	.02	.44	-.08	.12	.08	.57		.24
身体的疲労感	(32) 悪い夢で目をさますことがよくある	.17	-.03	.36	.39	-.04	-.15	-.11	.60	.45	.30
	(9)※学校へ行きたくない気持ちが生じることはあまりない	.05	.43	-.06	.09	.54	.33	-.03	.64		.12
	(12) 他人が、私の考えをすべてわかっているにちがいないと思うときがある	.001	.13	.07	.06	.71	.03	-.002	.62		-.24
	(17)※学校はおもしろいので家にばかりいたくない	.04	.17	.08	.02	.69	.04	-.10	.60		.14
	(1) 最近、朝が起きにくく遅刻したり欠席することがよくある	.03	.08	-.02	-.07	.11	.71	.003	.58		.26
対人的過敏性	(13)※疲れやすいほうではない	.07	.04	.22	.10	-.06	.66	-.14	.65	.51	.38
	(21) いつも体中が疲れているような気がする	.41	.16	.33	.25	.006	.44	-.02	.58		.33
	(3) 外に出ると(バスや店などで)、人から見られているのが気になる	.09	.31	.06	-.21	-.04	.002	.66	.78		.26
	(15)※人からからかわれても平気です	-.03	.02	.04	-.16	-.17	-.11	.79	.77		.26

※項目は、方向を逆転して得点化した項目 総項目得点との相関は、各項目得点とその項目を除いた下位項目尺度内の総項目得点との相関を示す。

TABLE 3 危機状態尺度得点と MAS 得点の相関値

A 水準	.57**
B 水準	.69**
合計	.68**

**..... $p<.01$

TABLE 4 本研究の対象と相談室事例との平均値の比較

危機状態尺度	本研究での平均値	相談室事例の平均値	t 検定
A 水準	78.55 (11.12)	96.72 (8.50)	$t=-7.16$ $p<.001$
B 水準	40.01 (6.42)	54.44 (7.92)	$t=-6.23$ $p<.001$

() 内の数値は、S D 値を示す

これらの尺度の安定性を検討するために、新たな対象を設け再テストを行った。その結果、約2か月後***の各下位項目尺度の再テストの得点との相関は .67($p<.01$) 以上と高い値を示した。このことから各下位項目尺度の安定性は、おおむね満足された。

(5) 尺度の妥当性

Kretschmer (1949) は、青年期の危機状態に陥ると緊張感が高まり、不安が顕在化してくると述べていることから、本研究における危機状態尺度の内容的妥当性を検討するために顕在的不安尺度 (MAS) を同様の調査対象に施行し、それと危機状態尺度の得点との相関値を示した (TABLE 3)。また、尺度の併存的妥当性を検討するために、九州大学教育学部心理教育相談室に來談し、「青年期の自我発達上の危機状態」に直面していると診断された事例12名**** (15歳~19歳、男子8名、女子4名) に対して危機状態尺度の評定を実施してその結果と本研究における調査対象の結果との平均値の t 検定を行った (TABLE 4)。TABLE 3 と TABLE 4 の結果から、作成された危機状態尺度は、既述した青年期における自我発達上の危機状態の定義に妥当する尺度ととらえられた。

(6) 下位項目尺度の命名

(A) の第1因子は「決断力欠如」、第2因子は、遠藤ら (1976) や砂田 (1979) の作成した自我同一性尺度の項目と類似する項目から構成されていることから、「同一性拡散」、第3因子は、日常生活や対人関係において自己の存在感が萎縮した内容の項目から構成されていることから、「自己収縮」、第4因子は、心を開いて話せる相手がない内容の項目から構成されていることから、「自己開示対象の欠如」、第5因子は、行動を実践するうえで

の集中力の欠如という内容の項目から構成されていることから、「実行力欠如」、第6因子は、親に対しての愛情欲求や親密感とそれらに相反する憎しみや反抗などのアンビバレントな感情群の内容の項目から構成されていることから、「親とのアンビバレント感情」、第7因子は、感情的なものよりむしろ価値観において親からの独立欲求と依存欲求のアンビバレンスを示す内容の項目から構成されていることから、「親からの独立と依存のアンビバレンス」と各々命名した。

また(B)の第1因子は、加害衝動や被害感などの緊張がうつ積し、その状況から逃げ出したいという内容から構成されていることから、「緊張とその状況の回避」、第2因子は、Janet ら (1903) のいう「精神衰弱」の診断基準に相当する主訴から構成されていることから、「精神衰弱」、第3因子は、「身体的痛み」、第4因子は、不思議な体験や食欲不振、悪夢など希れな体験や反応の内容から構成されていることから、「希れな体験や精神・身体的反応」、第5因子は、「閉じ込めり」、第6因子は、「身体的疲労感」、第7因子は、人の視線や嘲笑を気にしている内容から構成されていることから、「対人的過敏性」と各々命名した。このように下位項目を命名した結果、(A)では、青年期の自我発達上の危機状態の定義の前者の危機状態に相当する親子関係上の独立と依存のアンビバレントな問題や自我同一性確立の問題という青年期特有の葛藤内容の項目が抽出されており、また(B)では、定義の後者の危機状態に相当する交友関係上での閉じ込めり、緊張感や抑うつ感、あるいは身体反応という不適応状態の内容の項目が抽出されていることから、作成された尺度は、青年期の自我発達上の危機状態の定義におおむね符合するととらえられた。

研究 II

目的

研究 I で作成した尺度を用いて青年期の自我発達上の危機状態の性差や学年差を明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象

福岡県内の公立中学校の2年生87名 (男子41名、女子46名)、県立高校の2年生72名 (男子43名、女子29名)*****私立A大学の1年生56名 (女子)、私立B大学の3年生64名 (男子28名、女子36名) の計279名が対象とされた。

調査時期

***** 中学2年生と高校2年生を調査対象としたのは、筆者の臨床経験に基づいた。

*** 研究IIの調査対象

**** 臨床心理学的には、登校拒否10名、非行傾向2名と診断できる事例であった。

TABLE 5 危機状態尺度得点の平均値

対 象		平 均 値 (SD)	
		A 水 準	B 水 準
中学 2 年男子	N=41	77.54 (12.44)	39.41 (8.26)
中学 2 年女子	N=46	79.20 (13.30)	40.70 (8.69)
高校 2 年男子	N=43	82.42 (12.93)	40.14 (7.04)
高校 2 年女子	N=29	80.72 (10.48)	40.24 (8.00)
大学 3 年男子	N=28	77.04 (15.13)	40.18 (10.07)
大学 1 年女子	N=56	73.68 (11.02)	37.86 (6.88)
大学 3 年女子	N=36	80.33 (10.87)	40.17 (7.26)
計	N=279	78.43 (12.52)	39.68 (7.93)

1986年12月

調査方法

各学校各学級ごとと研究Ⅰで作成した尺度を一斉に実施した。

結果と考察

学年×性の各7群ごとに自我発達上の危機状態を(A)問題の内省水準(略してA水準)と(B)問題の自覚水準(略してB水準)の2つの観点で評定された結果の平均値はTABLE 5 のようになる。

また、A水準の総得点とB水準の総得点との相関係数は、.57 ($p<0.1$) を示し、さらにA水準の各下位項目尺度得点とB水準の各下位項目尺度得点との関連については、TABLE 6 に示した。TABLE 6 から Erikson (1959) のように自我同一性の確立の問題は、様々な形態で発現しているととらえられ、また逆に青年期の攻撃衝動の高まりによる緊張感とその状況の回避反応は、自我同一性の確立の問題や自己開示対象の欠如、また親子関係上のアンビバレントな感情などの多くの問題と関連しているともとえられる。

次に危機状態得点をA・Bの両水準に分けて、学年×性の2要因で分散分析を行ったところ、A水準のみに学年差が認められた ($F(2, 276)=4.05, p<.05$)。そこで各学年群を2群間に組み合わせてA水準の平均値のt検定を行ったところ、高校生と大学生間で有意差*****が認められた ($t=2.93, df=153, p<.01$)。このことから、A水準に関しては、古沢(1963)や松田ら(1982)による自我同一性得点の発達の推移結果と同様に中学生時から増大し始め、高校生の時期にもっとも顕著となり、その後減少するといった一般的傾向が示唆された。一方、B水準に関しては、分散分析の結果、学年差も性差も認められなかったことからA水準の問題が問題行動や精神・身体的反応として発現するのは、年齢や性差を問わず生じやすいのではないかとということが示唆された。このことから、A水準の内省される問題が、実際に不適応反応であるB水準の問題行動や身体症状や精神症状となって現われるには、村瀬(1976)のいうように個人の自我の強さや個人の置かれている状況要因が大きく作用しているのではないかとことが推察される。

さらに、A・B両水準ごとと各下位項目尺度別に性差や学年差によって危機状態得点に違いがあるかどうかを検討するために、学年×性の各7群を2群間に組み合わせて下位項目尺度の平均値のt検定を行ってTABLE 7 に示した。この結果から危機状態得点を下位項目尺度ごとにみれば、性差や学年差があることが明らかにされた。

要約と今後の問題

本研究は、青年期の自我発達上の危機状態尺度を作成し(研究Ⅰ)、この尺度を用いて一般青年を対象に青年期の自我発達上の危機状態の性差や学年差を明らかにすること(研究Ⅱ)を目的として行われた。

***** 本研究における検定はすべて両側検定を示している。

TABLE 6 危機状態下位項目尺度のA・B両水準の相関

A 水 準	B 水 準						
	緊張とその状況の回避	精神衰弱	身体的痛み	希れた体験や精神・身体的反応	閉じ込めり	身体的疲労感	对人的過敏性
決断力欠如	.24*	.18	.05	-.04	.19	.13	.04
同一性拡散	.52**	.53**	.32**	.27**	.33**	.37**	.13
自己収縮	.30**	.33**	.20*	.06	.35**	.34**	-.12
自己開示対象の欠如	.37**	.21*	.18	.14	.19	.15	.04
実行力欠如	.27**	.33**	.10	.06	.20*	.29**	.05
親とのアンビバレント感情	.33**	.20*	.13	.09	.11	.16	.17
親からの独立と依存のアンビバレンス	.17	.22*	.09	.10	.17	.20*	.12

***** $p<.05$ ** $p<.01$

TABLE 7 危機状態下位項目尺度別にみた男女別・学年別の平均値の差の検定

	中学生 男子：女子	高校生 男子：女子	大学生 男子：女子	男子：女子	中学生：高校生	中学生：大学生	高校生：大学生
(A)決断力欠如							t=2.84** 高校>大学
同一性拡散							
自己収縮							
自己開示対象の欠如		t=-2.21* 男子>女子		t=-3.23** 男子>女子		t=3.44** 中学>大学	t=3.25** 高校>大学
実行力欠如					t=2.65** 高校>中学		
親とのアンビバレント感情				t=-2.00* 男子>女子		t=2.59** 中学>大学	t=3.84** 高校>大学
親からの独立と依存のアンビバレンス						t=-2.56** 大学>中学	
(B)緊張とその状況の回避						t=3.74** 中学>大学	t=2.38* 高校>大学
精神衰弱				t=2.27* 女子>男子		t=-2.14* 大学>中学	
身体的痛み						t=2.70** 中学>大学	
希れな体験や精神・身体的反応					t=-3.87** 中学>高校		t=-2.57** 大学>高校
閉じ込めり					t=2.39* 高校>中学	t=-2.70** 大学>中学	
身体的疲労感		t=-2.14* 男子>女子	t=-2.34* 男子>女子	t=-2.92** 男子>女子			
対人的過敏性				t=2.18* 女子>男子			

.....p<.05 p<.01

研究Ⅰ， 1．尺度の作成

文献と筆者の臨床経験をもとに，青年期特有の心理（問題内省内容：A水準）と不適応状態（問題自覚内容：B水準）の2つの観点から青年期の自我発達上の危機状態を定義し，この定義に該当する臨床事例（13歳から20歳まで，男子64名，女子17名）のカルテをもとに暫定尺度項目を抽出・検討した後，これらの項目をA水準では5件法に，B水準では3件法に尺度化して，302名の一般青年（12歳から23歳までの男子113名，女子189名）を対象に施行して，その得点の因子分析を行った。抽出された各因子の内的整合性をクロンバッハのα係数の算出によってみた結果，最終的にA水準（26項目）とB水準（24項目）のそれぞれに7因子が下位項目尺度としてとらえられた。これらの下位項目尺度の命名によって，筆者の定義と作成された尺度とはおおむね符合された。

2．尺度の安定性と妥当性

作成された尺度を新たな対象（研究Ⅱの対象）に再度施行して，尺度の安定性をみたところ，各下位項目尺度の1での得点と再テストの得点との相関値は，.67以上（ $p<.01$ ）を示した。次に尺度の内容的妥当性について，研究Ⅱの対象にMASを施行した結果，作成された尺度の得点とMASの得点との相関値は，.68（ $p<.01$ ）を示した。また，尺度の併存的妥当性について，筆者の定義に該当する臨床事例12名（15歳～19歳，男子8名，女子4名）と研究Ⅱの対象との作成された尺度の平均値の比較を行

ったところ，有意な差が示された（ $p<.001$ ）。

研究Ⅱ

この尺度を用いた調査を279名（12歳から23歳まで，男子112名，女子167名）の青年に実施した。その結果は次のように要約された。

本研究で作成した尺度からみた青年期の自我発達上の危機状態の全体的傾向として，A水準とB水準とは有意な相関値が認められ，A水準においては，学年差が認められ，B水準においては，性差・学年差は認められなかった。このことから青年期において自我発達上の危機状態を意識しているものの，実際に不適応反応を示すまでには，個人の自我の強さや置かれている状況が大きく影響しているのではないかということが推察された。しかも下位項目尺度ごとにみれば，性差や学年差があることが認められた。

しかしながら，本研究の結果を一般化してゆくには，今後，多くの問題が残されていると思われる。とくに，(1)本研究の結果は，限られた調査対象による結果であることや(2)青年期の自我発達上の危機状態に陥る状況要因が明らかにされていないことや(3)項目抽出のうえで，筆者の定義に該当した臨床事例の大半が，「登校拒否青年」であったことから，項目抽出対象の限界性の問題があげられる。そこで，さらに厳密に項目を抽出するためには，今後は，筆者の定義と「登校拒否」以外の「非行」，「心身症」，「各種の神経症」の青年たちの問題自覚や問題内

省の内容との関連を検討する必要があると思われる。

謝 辞

論文の作成にあたり、九州大学教育学部教授 山内光哉先生に御指導を仰いだ。また、調査施行に際し、柳川市立柳城中学校、福岡県立山門高等学校、中村学園大学、福岡大学の先生方に御協力頂いた。厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 遠藤辰雄・安藤延男・井上祥治・峰松修・冷川昭子
1976 Ego-identity の研究(6) 日本心理学会第40回
大会発表論文集, 927.
- Erikson, E.H. 1959 Identity and the life cycle. New
York: International Universities Press. (小此木
啓吾訳 1973 自我同一性 誠信書房)
- 古沢頼雄 1968 青年期における自我同一性と親子関係
依田新(編)現代青年の人格形成 金子書房
- Häfner, H. 1954 Psychopathologie der Halluzina-
torischen Schizophrenie. *Archiv Psychiatrie und
Zeitschrift Neurologie*, 192, 241-255.
- Janet, P. & Raymond, F. 1903 Les obsessions et
la psychasthenie, 2. Paris: Alcan.
- Kretschmer, E. 1949 Psychotherapeutische Studien.
Stuttgart: Thieme. (新海安彦訳 1958 精神療法
岩崎書店)
- 松田君彦・広瀬春次 1982 青年期における自己像と自
我同一性 教育心理学研究, 30, 157-161.
- 村瀬孝雄 1976 青年期危機概念をめぐる実証的考察
笠原嘉・清水将之・伊藤克彦(編)青年の精神病理
弘文堂, 29-52.
- Meyer, J.E. 1962 Reifungskrisen der Adoleszenz,
ihre Entstehungsbedingungen und ihre Prognose.
Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheit,
203, 235-247.
- 清水将之・頼藤和寛 1976 青年期危機について(その
1) 精神医学, 18, 145-152.
- 下坂幸三 1976 成熟危機という概念 臨床精神医学,
5, 1211-1215.
- Speer, E. 1949 Vom Wesen der Neurose, 2. Stut-
tgart: Thieme.
- 砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性
教育心理学研究, 27, 210-215.

(1988年5月13日受稿)